

「私たちを変え続けて下さる神」創世記42：1－25 12・6・3 神は、私達の心の内に働きかけ、あらゆる感情も、思いも、静かにお取り扱いになる。私達一人一人は、神に取り扱われ、本当の意味で変えられる経験をして行く。それは、神の大きな御業。すべての社会的変革は、御靈による個人個人の魂の変革と無関係ではない。ヨセフがエジプトに連れ去られて十年以上が経った。聖書を最後まで読むと、やがてエジプトにイスラエルの民が避難することで、彼らが世界的な飢饉から救われるという神のご計画が分かる。ヨセフが売られて行ったのは、その道備えという不思議な神の摂理。今も私達にも、その時にはわからぬが、神の摂理、道備えがある。しかし、家族から引き離されたという問題がなおざりにされているのではない。その事に関与した兄弟たちの罪の問題が帳消しになっているのではない。神の摂理、支配と人間側の選択という二つの間の境界線は、あまりにも複雑。正義の神が人に罪を犯させるのではなく、人が自分の醜い性質に引きずられて罪を犯す。神は、その罪を問われる。42章には、この問題により苦悩する三種類の人間の姿がある。1. 父親のヤコブ。彼らの住んでいるカナンの地が飢饉となった。しかし、エジプトには食料があるという情報を得た。危機を逃れる為に、子供達十人を遣わす事になった。しかし、一番下の息子、ベニヤミンは自分の元に置いた。彼は、ヤコブが最も愛したラケルという妻の子供で、いなくなつたヨセフの弟。ヤコブにとって、ベニヤミンはヨセフと同様に特別。だからこそ、このベニヤミンも失われてしまいそうな思いになった。：4。年を取り過去の痛みにより脅えている父親のヤコブがいる。彼は、依然真相を知らず、ヨセフを死んだものと思っている。神を信じ、神の民であるイスラエルの代表だから悩みがないということではない。神を信じていても、人間としての痛みはある。正しく訓練できなかつた息子達により苦しめられている。偏った愛情をヨセフに注いだことで失敗を経験している。私たち人間はどんなに努力し、注意していても、その罪故に、どこかで間違えてしまう。しかし、私達には希望がある。私たちは、弱く不完全であつても、全能の神が、私達の心に、人生に生きて働かれるという恵みがある。こうしたヤコブの生涯にも、私達にも神の守りが確実にある。神に支えられて生きている。戦いと苦悩がある。年老いて弱くなつてきている。しかし彼は、依然として神の豊かなお取り扱いを受けている。自分の息子達に働いている神の御手の業を見るようになる。今も神は働いておられる。2. ヨセフ。ヨセフの所に兄弟達がやって来た。何と彼らはヨセフと知らずに、ひれ伏し、拝む。穀物を分けて欲しいと嘆願する。ヨセフは、自分の兄弟達だとすぐに気付いた。かつて自分を殺そうとし、エジプトに売り飛ばした兄達。憎しみとねたみに燃えて、愛する父や家族から自分を引き離し、こんなにまで悲しい思いをさせた存在。その兄達が、今十年以上も経つ

て、自分の前にひれ伏している。ヨセフは、自分が 17 歳の時に見た、あの実に鮮明な夢を思い出している。兄達の麦の束が自分の束に向かってお辞儀をしていた。それから太陽と月と 11 の星が彼を伏し拝んでいる夢。その夢を配慮なく語った時、兄達の怒りを買った。しかし、今実現している。夢の実現を目の当たりにして、洪水のようにあらゆる記憶がよみがえる。必死に願ったにもかかわらず、自分を商人に売り飛ばした兄達の表情まで覚えていたことだろう。ヨセフには兄達に復讐する十分な権威があった。名乗り出て「お前達が私をこれほど苦しい目に会わせたのだから、報いを受けよ」と彼らを脅すこともできたはず。しかし、彼はそれをしない。彼を抑えているものがある。それは、彼に少しずつ分かり始めている神のご計画。この苦惱の内に働く神の摂理、御支配。個人の苦しみとしてだけ考える事の出来ない、偉大な神のご計画の事を考えるよう導かれ始めている。※：9—：20→昔と少しも変わらない兄達なのか様子を探っているという面も考えられる。3. 兄達。「ああ、われわれは弟のことで罰を受けているのだなあ。あれがわれわれにあわれみを請うたとき、彼の心の苦しみを見ながら、われわれは聞き入れなかった。それでわれわれはこんな苦しみに会っているのだ」：21。彼らも、神に取り扱わっていた。碎かれていた。神を信じている者は、罪を犯して問われずに済むという事はない。神との交わりの関係がいつか問われる。罪があり、神と正しい関係にないと、平安を失う。罪故に歩みがとどめられる。それは、神が私達から遠く離れて、私達の歩みと全く関係のない所で御業を行う方ではないから。神は私達を愛して離わられる。私達は、自分で自分を変える事はできない。自分で自分を良くすることは不可能。しかし神は私達の魂に変革をもたらして下さる。兄達はヨセフを売り飛ばした事を忘れ去ってしまっているのではない。あれ以来ずっと問われ続けている。悔い改めが求められる。ヨセフは：21 の兄達の言葉を聞いていた。そして「彼らから離れて、泣いた」：24 とある。兄達のうちに働いておられる神の御業を知って流す涙。「ああ、兄さん達も、私を売った事で、ずっと問われ続け、苦しみ続けて来たのだなあ」というあわれみの思いからの涙。この家族に不思議な神の御手が静かに伸ばされている。このヨセフ物語の著者が、ここで神を具体的な形で登場させていないことには特別の配慮があるように思われる。神を直接的に表現しなくとも、このイスラエルの家族を通して働く神の偉大な決して神の御業を見過ごさないようにしたい。私たち一人一人の内面に働く聖霊の働きを覚えたい。神は、私達を救いに導き、魂を造り変え続け、主の姿、御性質に変え続けて下さる。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」Ⅱコリ3：18